

ゾシマ長老

長老とは——これはわれわれの魂を、われわれの意志をとらえて、自分の魂と意志に同化してしまう者なのである。長老を選んだならば、われわれは自分の意志を放棄して、**完全な自己放棄によってその意志を完全に彼にしたがわせることになる**。その覚悟をした者は、自分に打ち勝ち自分を支配する長い修業のはてに、ついにはこの一生涯の服従によって、もはや完全なる解脱に、つまり自分自身からの解脱に到達して、一生生きても自分のなかに自分を見出だせない人たちがたどる運命が避けられるようになるという希望をいだいて、すすんでその修業を、そのおそろしい人生学校をわが身に引き受けるのである。この発案、つまり長老制度は理論的なものではなくて、東方諸国で、いまではもう千年にもおよぶ実際の経験から創りだされたものなのである。長老にたいする義務は、わがロシアの僧院にもつねにあった普通の「服従」とは趣を異にしている。ここに認められるのは、長老に仕えるすべての人の生涯にわたる懺悔と、結ぶ者と結ばれる者との不壊（ふえ）の絆である。

ゾシマ長老のことで多くの人が言っていたことだが、彼はそれこそ長年のあいだ、彼のところへ心の懺悔に来て披から忠言や心をいやす言葉をぜひとも聞きたいと思う者に接して、いろんな打ち明け話や嘆きや告白をそれこそおびたしく自分の心に受け入れてきたため、しまいにはじつに**するどい読心力を身につけて**、自分を訪れる未知の人の顔をひと目見ただけで、その人がどんなことで来たのか、その人にはなにが必要なのか、はては良心がどういう種類の苛責に苦しんでいるのかということまで見ぬくことができるようになり、ときには来訪者がものも言わないうちにその秘密を言いあてて相手の度胆をぬいたり、まごつかせたり、ほとんどおびえさせたりするようになった。が、そんなときアリョーシャはたいていいつでも気がついていたのだが、はじめて長老の庵室へふたりきりで話をしに来る者でもみな、そこから出てくるときはほとんどきまって明るいうれしそうな顔つきをし、この上なく暗かった顔が幸福そうな顔に変わっていた。

やはりあの長老をおいてほかに自分の前に立つ真理の保持者はいないのだと信じこんでいた。『どっちみち、あの人は聖者なのだ。あの人の胸には万人を更生させる秘訣が、ついには**この世に真理を樹立する**力がひそんでいる、——だから、だれもが聖らかな人間になり、たがいに愛しあい、貧富の別も、貴賤の別もなくなり、だれもが神の子のようになって、真のキリスト教国が訪れるにちがいない』これが、アリョーシャが心に描いていた夢だったのである。

ドミートリイは、年は二十八、背は中背で、気持ちのいい顔立ちの青年だが、年よりはずっと老けて見えた。筋肉の発達した男で、非凡な体力の持ち主だということはひと目で察しがついたが、それでいながら顔にはなにやら病的なものがあらわれていた。顔はやせ気味で、頬はこけてその色は一種不健康な黄色味をおびていた。出目気味のかかなり大きな黒ずんだ目は、見たところじつと執拗に見つめているようでありながら、なんとなく視点が定まらないのだった。興奮して、

いら立って話をしているときでさえ、その視線は心のなかの気分どおりに従わず、なにかべつの、ときにはその場にまったくそぐわないような表情をおびるのだった。『あの男はなにを考えているのか、容易にわからないね』と、彼と話をまじえる連中がそんな批評をしたこともあった。また、人によっては彼の目になにか物思わしげな気むずかしげなところが見られると思っていた矢先に、突然彼の爆笑におどろかされた者もいたが、これは、彼がそういう気むずかしげな目つきをしているときこそ、彼の頭には陽気なふざけた考をえがうかんでいる証拠なのであった。

ちょうどこういったときに、この乱脈な家族の全員の顔あわせ、というよりも家族会議が長老の庵室でもよおされ、アリョーシャに大変な影響を与えることになったのである。この会議開催の口実は、実のところ、はなはだ怪しいものであった。そのころちょうど、ドミートリイと父親のフョードルとの**遺産相続と財産分配をめぐる不和**は、どうやらどうにもならないところまで行っていたらしい。ふたりの関係は緊迫化して、なんとも耐えられないものになっていた。

お前にはキリストがついておられる。いつまでもキリストを奉侍するがよい、そうすればキリストが守ってくださるからな。大きな悲しみにも会うだろうが、そういう悲しみに会いながらもお前は仕合わせでいられるはずだ。いいか、これがお前への遺言だ、**悲しみのなかに仕合わせを求めろのだぞ**。

君たちカラマーゾ

フ一家の問題はこの一点にあるんだ。**色好みと強欲と神がかり**にな！

ラキーチンがあとで語ったところでは、このときの食事は**五品用意**されたのである。ちょうざめ入りのスープに、魚肉入りのピロシキ、なにか特殊なすばらしい調理法でこしらえた煮魚に、紅魚でこしらえたコロッケ、それにアイスクリームに砂糖漬けの果物、そして最後にブラマンジェふうのフルーツ・ジェリーといったようなものだった。

「神も不死もです。神のなかに不死もあるんですよ」

「ふむ。どうも、イワンのほうが正しいらしいな。いやはや、考えてみただけでもおそろしい、人間はこの空想にどれほど信仰をささげ、どれほどの力をむだにしてきたことか、しかもそれは何千年ものあいだなんだからなあ！ いったいだれがこんなに人間を愚弄するんだろう？ イワン！ **最後に、きっぱりと言ってくれ。神はあるのか、ないのか？** これが最後の質問だ！」

「僕もこれが最後の返答です、**ありません**」

「じゃ、だれが人間を愚弄しているんだ、イワン？」

「悪魔でしょう、きっと」イワンはにやりと笑った。

「じゃ、悪魔はいるわけか？」

「いや、悪魔もいませんよ」

「そいつは残念だ。ちくしょう、そうしたらわしは、最初に神を考え出したやつをどうしてやっ  
たらいいんだろう！ やまならしの木にかけて縛り首にしても飽きたらん」

「神を考え出さないようだったら、文明なんか全然なかったでしょう」

「なかった？ 神がなかったらか？」

「え、え。コニャックだってなかったでしょうよ。それはそうと、もうコニャックは取りあげなく  
ちゃ」

イワンはにやりと笑った。「おぼえていてくれ、おれはい  
つでも親父を守ってやるつもりなんだ。ただ、望みという点では、この場合、自分は完全に自由  
でいたいんだ。じゃ、またあした。おれを責めたり悪者あつかいしたりしないでくれよ」と彼は  
にこにこしながらつけ加えた。

ふたりはたがいにこれまでになかったくらいかたい握手をかわした。アリョーシャは、こうし  
て兄のほうから進んでこちらに歩み寄ってきたからにはなにかあるのだ、かならずなにか下  
心があるのだという気がしてならなかった。

#### <グルーシェンカの形容>

と、カーテンがあがって……当人のグルーシェンカが嬉しそうににこにこしながらテーブルの  
そばへ歩みをはこんできた。アリョーシャはなにかびくりとけいれんでも起きたような気がし  
た。彼は、目が彼女に釘づけになったきり、その目をはなすことができなかった。これがあの女な  
のだ、あのおそろしい女、——三十分ほど前に兄のイワンが口をすべらして『けだもの』と言っ  
た女なのだ。ところが、彼の前に立っているのは、見ようによっては、一見ごくありふれた普通  
の女、——人のよさそうな、愛くるしい女で、たとえ美人にはちがいないとしても、ほかの一般  
の『普通の』美人と大して変わりのないただの女だった！ たしかに彼女はじつに美しかった、  
じつにと言ってもいいくらいだった、——たいていの男が熟をあげるくらい好きになるようなロ  
シヤ風の美人だった。それはかなり背の高い、とはいってもカテリーナよりはややひくく（こち  
らはまたすこぶる背の高い女だったから）、肉づきがよくて、身ごなしもまるで感じられないく  
らい柔軟で、その声と同様、これまたまるで一種特別なあまったるい感じがするくらいなややか  
な女だった。そばへ寄ってくるにも、カテリーナのように力強い活発な足どりではなくて、それ  
とは反対に、音もなく歩み寄ってくるのである。その足は床にふれてもまったく音をたてなかつ  
た。彼女は豪華な黒色の絹のドレスのやわらかい音といっしょに、ふんわりと椅子に腰をおろし  
て、まっ白なむっちりした首とゆたかな肩を高価な黒い毛織りのショールでたおやかにつつま  
だ。年は二十二で、顔つきもちょうどその年齢にぴったりだった。顔の色は抜けるように白く、  
頬にはくっきりと薄紅色がさしていた。顔の輪郭は幅がひろすぎるくらいで、下あごはほんの心  
持ち前へ出ていた。上唇は薄かったが、下唇は受け口ぎみで、倍も厚く、まるでぶっくりと張れ  
て見えた。しかし、まことにすばらしく、まことにゆたかな暗褐色の髪と、黒ずんだ黒貂(くるとん)の毛の  
ような眉毛と、まつ毛の長い、すばらしい灰色をおびた空色のひとみは、この上なく無関心で注  
意力の散漫な男がどこか人混みのなか、雑沓のなかをそぞろ歩いていても、その前でびたりと  
足をとめさせ、長いこと記憶にとどめさせずにはおかないものを持っていた。その顔でなにより  
もアリョーシャをおどろかしたのは、その子供っぽい無邪気そうな表情であった。物を見る目つ

きも子供っぽければ、なにかうれしそうにしているその様子も子供っぽかった。テーブルのそばへ歩き寄るにも、『うれしそうにして』、まるでいまにもなにかあるのではないかといかにも子供らしく待ちきれずに物めずらしげに信じきって待ち受けているような様子なのである。その目つきには人の心を浮きたたせるようなところがある、——それをアリョーシャは感じとった。彼女にはさらになにか、彼にもまだはっきりと理解できない、もしくは理解する力はないが、彼にも意識的に感じとれそうなものがあった。それは例のものやわかさ、身ごなしのしなやかさであり、そういう動作が猫のように音をたてないことであつた。が、それでいてそれは力のみなぎつた豊富な肉体だったのである。ショールの下には、幅のある肉づきのいい肩や盛りあがっているまだまったくわかかわかしい乳房が隠されているのが感じられた。もしかすると、その体はゆくゆくはミロのヴィーナスのようなものになるのかもしれない。もっともその釣り合いはどうしてもすでにいまでもいくぶん誇張したものになってはいるが、しかしそういったものは予感された。だが、ロンヤ的美人の通ならば、グルーシュンカを見れば、こうあやまちなく予言できたはずである、つまりこのみずみずしそうな、まだわかかわかしい美人も三十にむかう頃にはその調和をうしなつて、ぶくぶくふとりだし、肝心な顔も皮膚がたるみ、目のふちや額にははやくも小皺があらわれ、顔の色つやもなくなり、場合によっては赤紫色を呈するかもしれない、——要するに、これはまさしくロシヤの女にじつにしばしば見られるつかの間の美、うつろいやすい美であると。

#### <リーザのラヴ・レター>

いまもそういう祈り

をあげているあいだに、彼はふとポケットのなかのあのばら色の小さな封筒に、路上で自分に追いかけてきたカテリーナの小間使いが渡していった例の封筒に手がふれた。彼はとまどつたが、最後まで祈りをあげ、それからちよつとためらつた後、開封してみた。なかにはリーザと署名をした彼あての手紙がはいつていた——それは、けさ長老のいる前でさんざん彼をからかつた、例のホフラーコワ夫人のまだ年のいかない娘だつた。

『アレクセイさま』と彼女は書いていた。『この手紙をさしあげることはだれにも内緒です、母にも内緒です。そして、こんなことはどんなによくないことかということも承知しています。でもあたし、自分の胸に芽生えた気持ちをお伝えせずには、もう生きていけません。が、このことは、時が来るまでは、あたしたちふたり以外のだれにも知られてはならないことです。けれど、自分の申しあげたいことをどうお話したらいいのかしら？ 紙は顔を赤らめないとか申しませんが、でも請けあつて、そんなことは嘘ですわ、紙も、いまのあたしとおなじように顔をまっ赤にしていますわ。愛しいアリョーシャさま、あたし、あなたが好きです、まだ子供だつた頃から、モスクワ時代から、あなたがいまとはまるっきりちがつていらつしゃつた頃から好きでした、そして一生涯愛しつづけますわ。あたしが自分の心であなたを選んだのは、あなたといっしょになつて、ふたりいっしょに老いの生涯を閉じようと思つてのことなのです。もちろん、それはあなたに僧院から出ていただくという条件つきですよ。ふたり年のことでしたら、法律で定められている年まで待つことにしましょう。その頃までにあたしはかならず丈夫になつて、歩いたりダンスをしたりできるようになりますわ。こんなことは言うまでもないことです。

これでおわかりのように、あたしずいぶんいろいろ考えたんですけど、たったひとつ考えおよばないことがありますの、それは、あなたがこの手紙をお読みになつたとき、あたしのことをどうお考えになるかということです。だってあたしはいつ笑つたり、ふざけたりしているし、さつ

きだってあなたをすっかり怒らせてしまったでしょう、でも請けあって申しあげますけど、た  
いま、ペンをとる前にあたし、聖母さまのお像にお祈りをしたんですの、それにいまだってお祈  
りをあげながら、ほとんど泣きださないばかりですわ。

もうこれであたしの秘密はあなたのお手に握られているわけです。あしたあなたがいらした  
とき、あなたのお顔をどうやって見たらいいかわかりませんわ。ああ、アレクセイさま、もしま  
たばかみたいにこらえきれなくなって、さっきみたいに、あなたを見ているうちに笑いだしでも  
したら、あたしどうしましょう？ そうしたらあなたはあたしを、いやらしい、からかうことの  
好きな女だと思って、あたしの手紙の文句などほんとうにしてくださらないでしょう。ですから、  
たつてのお願いです、あしたはいつていらしたとき、あたしの顔をあんまりまともに見ないよ  
うにしてください、だってふたりの目が合ったら、あたしきつと突然嘔きだしてしまうにちがい  
ありませんもの、おまけにあなたはあんな長い服を着ていらっしゃるんですもの……いまでさ  
え、そのことを考えると、あたしぞうっとしてしまいますわ、ですから、おはいりになったら、  
しばらくのあいだあたしのほうを全然見ないようにして、母のほうか窓でも見ていてください。

とうとうあなたにラヴ・レターを書いてしまいましたわ、ああ、なんということをしてしまっ  
たのでしょうか！ アリョーシャ、あたしを軽蔑しないでください、もしも大変いけないことをし  
てあなたに心配をかけたようでしたら、お許してください。もうこれで、永久にうしなつたかもし  
れないあたしの名誉の秘密は、あなたの手のにぎられているわけです。

あたし、きょうはきつと泣きますわ。さようなら、おそろしい再会のときまで。リーザ。

追伸。アリョーシャ、かならず、かならず、かならずいらっしゃってくださいね！ リーザ』

アリョーシャはおどろきをおぼえながら読みおえた。そして二度読んでから、しばらく考えて  
いたが、不意にそうっと楽しそうな微笑をもらした。彼はびくっとした。その笑いが罪ぶかいも  
のに思われたからである。しかし、つぎの瞬間には、またもやおなじようにそうっと、おなじよ  
うに幸福そうな笑いをうかべていた。彼はゆっくりと手紙を封筒におさめると、十字をきって横  
になった。胸さわぎは急におさまってしまった。

<フールドル>

「いまのところわしはやつと五十五だからこれでもやはりまだ男だが、まだ  
これから二十年は男の戦列に加わっていたいのだ、ところがこっちは年をとってくるにつれてき  
たならしくなってくるから、そうなるど女どもはむこうから進んで寄りつくこともなくなる、さ  
てそうしたときに必要になってくるのはこの金なんだ。だからこそわしはこうしてますますでき  
るだけ金をためこもうとしているわけだよ、それも自分だけのためにな、かわいい倅のアレクセ  
イ、これもお前さんにご承知おき願いたいな、というのは、わしは最後まで自分の醜悪な世界に  
生きていたいからなのだ、これもひとつご承知おき願いたいね。醜悪な世界のほうが居心地がい  
いんだ。みんなはこの醜悪な世界を悪く言うが、やつらだつてそういう世界に生きているんじや  
ないか、ただみんなはこそそそやっているが、わしはおおっぴらにやっているだけのことだ。(略)

アリョーシャがなにか本能のようなもので直感したのは、カ

テリーナのような気性の女は支配せずにはいられない、ところが彼女が支配できるのはドミート  
リイのような男だけであつて、けつしてイワンのような男ではないということだつた。なぜそう

かという、ドミートリイならば（たとえ長いあいだかかるにしても）ついには『自分の仕合わせのために』彼女に服従することはありうるだろうが（これはむしろアリョーンヤの希望するところだった）、イワンのほうは彼女に服従することはありえないし、服従してもそれは彼に幸福をもたらすはずはないからである。

<二等大尉ニコライ・イリイチ・スネギリョーフと息子イリュシャ>

が、そのうちまた散歩に出たんでございますが、そのときあの子が『パパ、パパ、いちばん強いのは金持ちなの？』とこう聞くものですから、『そうなんだよ、イリュシャ、世のなかに金持ちより強い者はいないんだよ』と言いますと、『パパ、僕はうんと金持ちになるよ、そして僕、将校になって、みんなを打ち負かしてやるんだ、そして皇帝陛下からご褒美をいただいて、ここへ帰ってくるんだ、そうすればもうだれもあんなひどいことはしないものね』

見つめていた。

「いったいどうなすったんです、手品ってどんな手品ですか？」とアリョーシャはすっかり度胆をぬかれて叫んだ。

「こういうやつですよ、見ていてごらんなさい」と二等大尉は頓狂な声をあげた。

そして、そのあいだじゅう、話をしているあいだじゅうずうっと右手の親指と人差し指で二枚いっしょに角のところをつまむようにして持っていた虹色の紙幣を相手に見せたかと思うと、やにわに奮然としてそれをひつつかみ、もみくしゃにして、左手のこぶしのなかにぎゅっと握りしめた。

「ごらんになりましたか、ごらんになりましたか」と彼はまっ青な狂暴な顔をしてアリョーシャにむかって金切り声で叫ぶなり、いきなりこぶしを振りあげて、その二枚のもみくしゃになった紙幣を砂に力いっぱいたたきつけて、「ごらんになりましたか？」と、それを指さしながら、また金切り声で叫んだ。「さあ、このとおりでございます！ ……」

そう言うと、いきなり右足をあげて、あらあらしく憎らしげにそれをかかとで踏みにじりはじめ、足でひとつ踏みつけるたびにかけ声をかけ、はあはあ息をはずませていた。

「ほら、あなたの金はこのとおり！ ほら、このとおり！ ほら、このとおり！ ほら、このとおりです！」こう言うなり彼はぱっとうしろへ飛びのいて、アリョーシャを前にして身をそらした。その様子ぜんたいになんとも言いようのない誇らしげな気持ちがあらわれていた。

「あなたを使いによこした人たちにつたえてください、へちまは自分の名誉を売るようなことはしないって！」

ロシア文学に人間が書いたとは思えないような巨大な作品が二つある。ひとつはトルストイの『戦争と平和』であり、もうひとつはドストエフスキイの『カラマーゾフ兄弟』である。前者は人間社会の流れをパノラマ的に壮大に展開したという点で、後者は**人間存在の秘奥をこれ以上不可能なまでにふかく掘りさげた**という点で読者の目を見張らさせずにはおかない。

ここでも主題は作者が「私が一生涯意識的に無意識的に苦しんできた」と言っている『**神の存在**』で、主人公は**信仰と不信仰とのあいだをさまよう**のであるが(略)

ドストエフスキイはのちの女流作家ポチンコフスカヤに「**けっして筋を捏造してはいけません**。生活そのものから取ってくることです。生活はわれわれの思いつきなどよりずっと豊富なんですから！ あなたがどんなに想像を働かしても、この上なくありふれた月並みな生活から得られるものすら思いつけやしません。生活を重ねるんですね」と忠告していたように、筋立てや挿話の材料集めに大変な時間と労力を費やす作家であった。

『カラマーゾフ兄弟』は、作者が創作活動の全期間にわたって数多い作品で試みてきた手法をことごとく駆使し、長いあいだ温めていた思想をのこらず吐きだそうと思い、自分の作家活動に締めくくりをつけようとした総合的な長編小説である。

それだけに、この作品は**親殺しを主筋**としていながら、その主筋はほかのあまたの脇筋と複雑にからみあい、それぞれ個性のある複雑な性格の人物たちがたがいにさまざまな交渉をもち、愛しあい、憎みあい、惹きあい反撥しあい、議論をたたかわし、喧嘩をし、狂恋の燃え立つ激情や、温和なキリスト教的愛や、罪に満ちた陰謀や、心温まる美しい企てや、ふかい宗教哲学や社会思想や、深刻な苦悩や歓喜が相交錯し、もつれあって、混沌たる光景を展開しているため、それが**作品の本質と作者の意図を見究めることを困難**にしている。

一方の極にはキリスト教的愛の教えを説く慈愛の人ゾシマ長老がおり、その教えを承(う)けついで、これを実行し、起ころうとする一家の悲劇を食いとめようと苦慮し、少年たちを友愛の精神で結合しようとする柔和ではあるが意志の強固な青年、カラマーゾフの三男のアリョーシャがいる。他方の極には、好色でシニクで無神論を奉ずる貪欲な父親のフョードルと、その無神論を理論化して理論的に極端に推しすすめてアナーキズムにまで達するニヒリスティックなわかい哲学者であり、西欧主義者である次男のイワンと、その理論を俗悪に解釈して、イワンの「すべては許される」というテーゼを実行に移して人殺しを敢行する、残忍酷薄で、自分を私生児として生んだ父親を憎み、自分より恵まれている正腹の兄弟たちに羨望をいだき、ロシア社会ぜんたいを白眼視し、フランス人になることを夢見ている根性のひねくれたスメルジャコフがいる。物語はぜんたいがこの両極、**信仰と無神論との激突、その対決**から成り立っているといい。作品の構成と筋立てもこの衝突と対決を中心として構成されているが、それはまた人物個々人の

内的世界にも移されてその内面的葛藤を発生させ、個々の人物の心理的な苦悩をともなっているところに、この作品の深味もあり、複雑さもある。